キャラクター名
ダフネ・アエミリウス・ラウラ

プレイヤー名

シンドローム	ソラリス ウロボロス	ワークス	オカルティスト	カヴァー	フリーライター
オプショナル		年齢	23	性別	♀
覚醒	感染	衝動	嫌悪	初期侵食率	36 %
出自	旧家の生まれ	経験	身体剥奪	邂逅	恩人

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	1	0	0			1
感覚	1	0	0			1
精神	3	1	0			4
社会	3	0	0			3

HP	26
行動値	6
(非装備時)	6
戦闘移動	11
全力移動	22

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			ＲＣ	14		交渉		
回避			知覚			意志	1		調達	1	
運転：			芸術：			知識：ｸﾄｩﾙﾌ	2		情報：学問	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

要人への貸しw/ストーン	
高性能治療キット	

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
後援者	P	N		
ランドルフ・カーター	P 感服	N 劣等感		
垣間見えた外なるもの	P 好奇心	N 恐怖		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 8	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
タブレット	3	2	aut					
効果：Sol;eff射程視界化								
多重生成	3	3	aut				lim	
効果：└対象[Lv+1]体化								
虚;ブリッツクリーク	1	4d+2	ini	視界	単		120	
効果：即時追加MP行動.侵基+3								
覚醒の秘薬	1	2d	ini	視界	単		120	
効果：対象未行動化. 1/sr								
活性の霧	5	3	set	至近	単			
効果：~r攻+[Lv*3],ドッジ-2d								
アクセル	5	1	set	視界	単			
効果：~r行動値+[Lv*2]								
□:鮮血の奏者	3	4	set	視界	単			
効果：Lv↓HP消費:~r攻+[HP*3].侵基+3								
さらなる力	1	5	maj	至近	単	RC/20	80	
効果：対象未行動化. 1/r								
戦乙女の導き	5	2	maj	至近	単			
効果：次maj+[Lv]d,攻+5								
夢の雫	4	3	aut	視界	単		lim	
効果：判定直後達成値+[Lv*2], 1/r								
メモリー:アラベラ･アエミリウス･ラウラ	1	-10	backtrack					
効果：感情:懐旧/母親.								
イージーフェイカー:精神覚醒	★	2						
効果：1体と言語無視意思疎通.〈意志〉侵基+1								
竹馬の友	★				単体			
効果：対エキストラに信頼される.〈交渉〉								

永続的狂気：フェティシズム→対象：

・産まれと覚醒まで　英国出身

　元々地球上では極希少なダオロス信仰であった家系。より正確には、そういった者達から僅かに流れてきた比較的真っ当な術を、脈々と継承してきた占星術師の血筋である。とは言え長い年月の中で、その本来の有り様はダオロスという名前も含めて忘れられ、現在ではただ稀に幻覚とも気の迷いともつかない未来視を得られるだけの、胡散臭い占い師と成り果てていた。そして人口の光が溢れ、多くの闇が払われ始めたこの時代に産まれたダフネは、そんな"オカルト"はあくまで娯楽であり、人々を楽しませる手段でしかないと感じていた。故に、若い時分から家を飛び出し、その占いもどきで噂を収集しては、ゴシップネタを記事にするという暮らしをしていた。

この時代に若い女が1人で生きるなど無謀なことこの上ない筈であったが、幸運か、それとも彼女の手腕か、はたまた超自然的な血筋故か、無事に過ごしていた。

　ただその幸運は長くは続かない。外れに、いやライターである彼女から当たりであったか、何はともあれ本物に彼女は出くわしてしまう。いつも通りネタを求めて占い稼業をしていた際に夜に奇妙な声が森から響き渡るという情報を聞く。オカルトという娯楽を前にして、ライターとしての血が疼いた彼女は、その場所へ向かった。鬱蒼として月の光すらも届かない深夜の森の中、あからさまに怪しげな準備を行う数人がいた。彼らは歪な2本の黒い蝋燭の頼りない灯りだけで黙々と準備をし、周囲を更に幕で覆った。それは非常に簡素であったため、ダフネは簡単に外から中を覗くことが出来た。彼らは何か構造物を囲って、間もなく奇怪な言葉を唱え始めると、不思議なことに独りでに蝋燭の火が消えた。声は次第に大きく、絶叫じみたものになり、何やら良からぬ空気が辺りに充満していく。そうして急に、声は止んだのだ。しばらくしても何も起こらないため、あまりの迫真の儀式に期待していたダフネも、やはりただのオカルトかと気が抜けた直後、カサカサと異音を耳にする。彼らが囲う構造物の中から何かが、這い出してきている。明らかな異常現象に彼女は咄嗟にカメラを構え、フラッシュを焚いた。閃光がそのものの姿を顕にしたその瞬間、彼女は認識してはいけないものを認識してしまう。這い出てきた存在、決して人の脳では捉えきれないその輪郭を正しく追おうとし、膨大な情報と狂気が、彼女の精神を襲う。その刹那、彼女の精神は、這い出た存在の中央から覗かれる異次元のその先、外宇宙に存在する自身とよく似た存在と繋がってしまう。その繋がりの先の存在、本来は明るく優しい少女であるそれは、この次元では狂気に歪められ、冒涜的な外なるものと同格の、悍ましき存在へと成り果てたそれとの交信で、彼女の精神は異次元へと持ちさられ、異物と取って代わられようとした。しかしこの瞬間、何者かが掲げた印が、外なるものの侵入を阻み、ダフネの心と体を救出する。一瞬の邂逅の後、這い出たモノは何事もなく帰り、ただその姿を目撃した故に狂気に陥り腑抜けと化した儀